



5134 (88)

収集家と学問の近代化について——木村兼葭堂の場合

W・ミヒェル

近世ヨーロッパのコレクションの前身を追求すると、中世の教会が蓄積していた遺品、聖遺骨等に辿り着く。日本の宝

5135 (89)

物殿の神宝、法具等は西洋の場合と同様に見る人の視線を古
代に誘い、神秘的な力を發揮する。ルネサンス時代以降、西
洋の個人コレクションの歴史が始まる。当初は一般的で代表
的なものよりも無比なものが求められた。「驚異の部屋」の収
藏品は、古美術品等のような人工の品々と共に、自然標本に
至るまでの広がりを見せた。自分のコレクションを研究目的
に利用する薬剤師、医師、学者にとっては収集品の特殊性よ
りも類型性こそが重要だった。大自然を縮小した形で自分の
管理の下に置いたコレクションでは近代的研究方法が発達し
た。

日本においても海外からの珍品がモノの蓄積を促進した。
室町時代には中国の珍品を飾るための違い棚、書院等が造ら
れるようになった。西洋人の到来により舶来品の種類はさら
に豊富になり、貿易の世界的規模化は日本の富裕な人々の生
活環境を大きく変えた。勿論資源に乏しい日本では物品の実
用性も常に重視された。田村藍水、平賀源内、佐久間象山な
ど江戸時代の代表的な学者は、何らかの形で幕府の意に沿
国内の産物を追究していた。そのような意味で、近世大坂の
木村兼葭堂（1736-1802）は町人学者として政治とは
切り離されたところで収集を行った風変わりな一例である。
古物から自然標本に至るまでの広がりを見せるその膨大な
コレクションについては、平戸藩主松浦静山が「甲子夜話」

で、「其所貯スル物ヲ見ルニ書画草木玉石鳥魚ニ至ル迄和漢ノ
品物皆アリ」〔三〕、又庚戌ノ書牘ニ云フ蔵書既ニ二万巻ト」と
記している。また「先哲叢談統編」では、「浪華木村異斎好學
嗜博、兼葭堂、收藏古今之書十万余卷、又儲集書畫法帖古
器名物」とまでいわれた。とりわけ貝石標本の場合は観察、
同定、分類という近代の学問の芽生えも感じられる。

西洋においても東洋においてもコレクションは社会的側面
を持つものであった。兼葭堂の収集品は、純粹に学問的な目
的のために蓄積されたものとは言いがたく、ヨーロッパと同
様に収集家の社会的交流との関連性が高いものだった。西洋
の陳列室に入ると標本の大半は専用の豪華な整理箆筒にしま
い込まれ、見物客の眼から隠されていた。この容れ物自体も
コレクションの一部であった。兼葭堂の「貝石標本箱」も同
様の役割を果たしていたといえる。

17世紀ヨーロッパに誕生した学会が求めた規律と訓練まで
の意欲は感じられないが、兼葭堂に集まる知識人たちはあら
ゆるものを鑑賞しながら情報とそれぞれの考えを提供し合い、
強い好奇心を知的好奇心に洗練しながら、近代の学問への地
ならしを行った。これをサロンと呼ぶが研究者もいるが、本
来のフランスのサロンとの相違点を見過ぎてはならない。

（九州大学教授）